
オムレッツ短編集

オムレッツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オムレツ短編集

【Nコード】

N5598U

【作者名】

オムレツ

【あらすじ】

この短編集は、底辺ゴミ屑ヤローと揶揄されても仕方ないレベルの下下手法作者たちの微妙な作品を淡々と集めた短編集です。過度な期待をしてもいいですが、その場合は感想を書きやがってください。あと、部屋は暗くして作者たちとの心の距離を3m以内に保ちながら読みやがってくださいコノヤロー。

注意事項

ちゅーいじこう♪

このしょうせつは
ばかどもが

じぶんのもうそうを
かきつらねたじいしょうせつです。

そういったものに
めんえきのないひとは
きをつけてください☆

しすてむしょうかい♪

このしょうせつでは
ふくすうのさくしゃが
てーまにそってかいていきます

てーまはしょうごとにかんりして
そのなかにさくしゃががんばってたんぺんにまとめてかきます

さくしゃのりきりようがためされるこんかいのきかく
はたしてさくしゃたちはしっそうせずに
いきのこることができるのか☆

上記の文は俺2さんが考えました。

ここからはオムレツを代表して深冬がお送りします。
オムレツについてはマイページを参照してください。

この短編集は章に書かれた『キーワード』で私たちが即興で書いた
短編を集めたものです。

掲載順については、書き上がった順となります。

個々の後書きについては、担当した短編の後書きに書かれています。

感想は頂いても基本的に返信する事はありません。

誤字脱字の場合にのみ、お礼の返信をさせていただきます。

感想の書き方についてですが、最初に章に書かれた『キーワード』
と作者名を書いてから感想を書いてください。そうしなければ、誰
のどの作品について書かれた感想かこちらとしては把握できかねま
す。

また、感想にて『キーワード』を募集します。

※頂いた『キーワード』を必ず使用するわけではありません。

漫画やライトノベルのタイトルでも良いし、『魔法』や『恋』とい
った単語でも良いです。

不定期投稿ですが、これからよろしく願います。

【深冬】 オレと出会いとハードカバー

人はオレを“可哀想な子”と呼ぶ。

だけれどもオレは自分の事を可哀想なんて思った事は無い。

例えば、両親がいなくてもオレは一人で生きていける。

その事実だけでオレは自分が可哀想なんて思わない。

こんな自分一人では生きていけないようなヤツらが蔓延るこの社会の中で、オレは誰にも頼ることなくオレ一人の力だけで生きていけるんだ。

だから、他人から可哀想なんて言われる謂れは無いし、むしろ言ったヤツが本当は可哀想なヤツだということをオレは知っている。
他人を憐れむと言うのは、その他人を憐れんだ自分に酔っているのだ。

そんなヤツこそがオレは可哀想だと思う。

「なんや、こんなところに人がおったのか。ビックリしたわあ」

「あん？」

一人、図書館の奥の誰もやってはこない読書スペースでハードカバーを開いているとそんな関西弁だか京都弁だかオレには判別不能の方言が聞こえてきた。

顔を上げてその声の主を確認すると車イスに乗った少女だった。衣服は夏らしく半袖のTシャツと七分丈のズボンで髪は茶色のショートカットだ。

「ここええかな？」

「自由スペースなんだから勝手にすれば良いだろうに」

「ほな、そうさせてもわうわ」

少女は器用にレバーで車イスを操作してオレの対面まで移動し、持ってきたハードカバーを開いた。

この図書館の奥にある読書スペースは、普段は酔狂な人が時々来るぐらいで、必要最低限に肘掛けも背もたれも無い小さな丸いソファアが二つ三つ置かれている。

――ペラッ

ページを捲る音だけが読書スペースを支配していた。

意外だな。見たところ俺と同じぐらいの少女なのに、騒ぐ事も無く静かに読書を楽しんでいる。しかも俺と歳が同じくらいと言うことは、小学三年ぐらいなんだろう。なのにハードカバーを嗜むとはなかなか読書好きなようだ。

そんな事を思考の片隅で思いつつ、オレは自らの手に持つハードカバーを読み進めた。

――パタンッ

最後まで読み終え、開いていたハードカバーを閉じる。勢い余っ

て音が出てしまったが、少女の迷惑にはならなかっただろうか？
視線を向けてみたが、少女は音なんかなら気にせず読書が続けていた。

……良かった。オレは読書を邪魔されるのが嫌いだ。だからオレも他人の読書を邪魔しない。自らがされて嫌な事を自らでするのはおろかな行為だとオレは思う。

ずっと同じ姿勢でハードカバーを読んでいたのも、一度身体を伸ばす。その時に壁時計を見てみるとそろそろ午後五時に差し掛かるうとしていた。

「なあ、そろそろ五時になるんだが、帰らなくて良いのか？」

他人の読書の邪魔はしない。だけれども、目の前でハードカバーを読んでいる少女はどう見てもオレと同じ小学生。門限と言うモノがあるはずだろう。

少女はオレの言葉を聞いて壁時計に視線を向ける。

「ほんまや。そろそろ帰らないとあかん。教えてくれたっちゅうことは君も帰るんやろ？ いっしょに図書館の入口までいかへんか？」

「そうだな。今日はもう帰る事にするか」

今日みたいな休日はいつも閉館時間までオレはここでずっと本を読んでいた。だけれども、オレがここに残るなんて言ったらこの少女が「だったら帰らない」とでも言い出すかもしれない。

「どれ押してやるよ」

読書好きに悪いヤツはいない。

そんなことを信条としているオレは車イスのレバーを操作しようとしていた少女の背後に回り込み、車イスに取りつけられている取っ手を掴む。

「ありがとな」

「気にするな。お前にはさっきまでオレが読んでいたハードカバーを持ってもらうから」

交換条件だ、と言って少女の手に使っていたハードカバーの上にオレの読んでいたハードカバーを積む。

「今まで気にしたことなかったけど、結構重いんやね。ハードカバーって」

「まあ、車イスを押すのと交換条件にできるぐらいだからな」

初めて車イスを押したので少女に振動などで不快な思いをさせていないかと心配したが、少女はその事について何も言わずにオレの操作に身を任せてくれた。

オレが読み終わったハードカバーを本棚に戻し、少女が読みかけていたハードカバーは受付で借りた。

そして少女との別れが来た。

「もう、どこ行ってたんですかはやてちゃん。時間になっても来ないから心配したんですよ」

ようやく待ち人が来たと安堵するこの金髪のお姉さんは、どうや

ら少女の保護者らしい。髪の色から血縁関係には無いと思うが、いったいどういう繋がりなのだろうか？

「ごめんなシャル。ちょっと今日は気分を変えて奥の方で読んでたんよ。それでこの子と知りおうてな。ええっと……そういえば、名前まだ聞いてなかったな」

「ああ、そういえば自己紹介がまだだったな。でもまあ、それは次会った時にでもする事にしようか。人の出会いは一期一会って言っし、二度出会うことができれば、もはやその出会いは必然だったってことだ」

「そうやな。ほな、そういうことにしよか。シャルも今この場でわたしの名前言ったらあかんよ」

「はい。はやてちゃんがそう言うなら……あっ！」

この金髪のお姉さんは結構ドジなようだ。

「もう、シャルのバカっ！」

「ごめんなさあゝい」

はやて、ね……。

まあ、次に会った時にでも初っ端から名前で呼んでやるか。

——出会いは必然

以前どこかで読んだ本に書かれていた言葉だ。

オレはその言葉を頭から信じているわけではないが、このはやて

という少女との出会いは本当に必然なのだろうか？

翌日、すぐまた出会うことになるなんて、この時のオレは考えてもみなかったけど。

【俺2】 アリサちゃんの初恋☆ミ

気に入らない。

私は目の前を歩く人物に敵意を向けながら歩いていた。

目に入るものの全てが気に入らない、隣を歩いている親友のすずかは苦笑いを浮かべながら私を見ている。

いつもなら大学が終って、たまに親友と会える貴重で楽しい時間なのにも関わらずこうしてイラついているのには訳があった。

その理由というのは私の前方を並んで歩いている二人の人物のせいである。

「ユ一ノ君！ 今度の休みなんだけどね？……」

「うん、なのは。もちろんだよ！」

このバカップル二人組みは昼間の講習の往来でこうして誰にたばかる事も無くイチヤイチヤイチヤイチヤとしてくださがりやがっているのだ。

そりゃ、なのはだってもう20もう過ぎて誰と付き合っていたとしても全然おかしくない年齢である事は理解できる。

二人とも忙しくて、今回たまたま重なった日がこうして三人で会う日であったことも理解しよう。

しかし親友であるすずかと私を置いておいて二人でイチヤイチヤするのは認められない、というか鬱陶しい！

「ア、アリサちゃん」

「何よすずか。私はあいつらに思念を送るので忙しいのよ」

「その……怖いよ？」

それは当たり前だ。

今自分は想いに質量があれば確実にその馬鹿と淫魔を潰せるく
らいの想いを発し続けているんだから。

ああ、これが憎しみで人を殺せたらというやつなのだろうか。

こうやってさすがに平静を保っているのはきっと中学高校大学と
告白され続けていると言う実績を持っているからだろう。

それに引き換え私は一度たりとも告白などされた事が無い、それ
どころか避けられているように感じる事さえあった。

耳を澄まして声を聞いてみると「リアルのツンデレはちょっと……
」だの「ツンが消えるか分からんし、もしかしたらツンツンかも」
などという言葉がちらほら聞えてきた。私はツンデレとか言うもの
になった覚えは無い。

私だってそういう……なんと言うか……恋愛と言うモノをしてみ
たいと思った事は何回もある。

気になった人だって………いたような気がしない事も無
い事も無いようななんというか曖昧とした感情を理解するほうが難
しいのよ！

自分でも何を言っているのか分からなくなってきた。

きっとアレなのだ。

私に相応しい人が居なかったただけなのだ。

私とつりあうような人物がこの海鳴町には存在していなかっただ
けなのだ！

そういうことしておけば全てが平和に丸く収まる。

「ねえアリサちゃん」

「何よ、忙しいんだってば」

「アリサちゃんってユーノ君が好きなの？」

「へ？」

え？

どこをどうしたらそのような結論に達するのでしょうか。

私がユーノが好き？

「ど、どうしてよ？」

「だって、なのはちゃんとユーノ君が付き合うつて知った時結構動揺してたし、今も睨んでるし」

「こ、これはあの二人がイチャイチャしているからで……！」

「……」

すずかは何も言わずに私をジッと見てくる。

だってアイツってば男の癖にフェレットの格好をして温泉に一緒に入ってきたり、してたし、そのフェレットのアイツを全身くまなく撫で回してたりしちゃったし、これはもう変態としかいえないような生物なのよ？

そりゃ私だってちよつと悪い事しちゃったかなーとか思ったりもしたし、それにフェレットの時には可愛いし、なのはだってフェレットだから大丈夫とか言ってたし、私も同じ年齢だからそれが適応されるわけで……

「アリサちゃん、戻ってきてー」

「はっ」

少し思考の海の中にダイブしていたようで、いつの間にかユーノ&なのはの姿が遠くになってしまっていた。

「どれでどうだった？」

「なにが？」

「え？ ユーノ君の事を考えてたんじゃないの？」

「そそそんな！ アイツのことなんて考えて無いわよ！」

すずかはなんで私の考えていた事が分かったんだらうか。

すずかは「ふーん」と言いながらも「分かってるよアリサちゃん」とでも言いたげな目を私に向けてくる、な、何よその目は。

「赤くなったり真っ赤になったりにやけたり忙しいねアリサちゃん」

私ったら正直者なのね、主に顔が。

「ねえ、アリサちゃんって男の人を好きになった事ってある？」

「無いわね」

「どうして？」

いや、どうしてって言われても知らないわよ。

たまたま好きになれるような人が近くに居なかったからとか、やっぱり私に相應しい人が居ないとか。

「相應しいって……」

「いや、冗談よ？ 冗談」

だからそんな呆れたような目でこっちを見るんじゃないわよ。

私だってそんな事欠片程度しか思っただけだから。

「私も考えてみたんだけど、それって好きな人がもういたからじゃないかな」

「好きな人が？」

「そう、でもその人が近すぎたから隙だって事に気がつかなかった」
「なんだか小説みたいな話ね」
「でも事実だよ」

ん？

「それってつまり」

「うん、私も最近気が付いたんだ。ユーノ君が好きだったんだって」
「うええ！？」

「ふふ、驚いた？」

「驚かないもんですか」

それってつまりそう言う事で？

もしかしたら三角関係どころか下手したら四角関係が出来上がってたってことに？

いや、ちょっと待ちなさい、なんでナチュラルに私も混ざってるのよ。

「わ、私はちがっ」

「違うの？ 自分の気持ちを否定するの？」

「うっ」

すずかの目は私を見ていた。

その黒い目が私の身体を貫く。

この子は私の気持ちに気が付いているのだろう、なぜならば自分も通ってきた道だから。

きつとあの二人を見ているときに感じたこの憎しみとか妬みとか、この胸の中にあつたモヤモヤしてたところは嫉妬だったのだろうか。

気が付いてみれば簡単な事だった。

私は好きにならなかったんじゃない、すでに好きで好きでたまらない人がいただけなのだ。

だけどそれは隣に居てたまにお話して、愚痴を言ったり聞いたり、遊んだりして、近くに居すぎたから私は、いえ、私たちは逃がしてしまったんだ。

「知らないうちに初恋が終ってるって最悪だわ」

「あはは、そうだね」

でも、親友にとられたのだから許すでしょう、あの子達の中のよさは私が良く知っている。

あの二人の間に割り込むなんて事はできるはずも無い事だってわかっていた。

でも少しだけ、いえ、すごく悔しいから二人がいるであろう方角に向かってもう一度だけ睨みつける。

「ふん！ 絶対になのはが羨むような良い人をみつけてやるんだから！」

それだけ言うときっとだけスッキリしたような気持ちになった。

「そうだ、アリサちゃん聞いてよ」

「何よ」

「一昨日大学が終ったあとにね……」

【TR】 嫉妬戦隊

やあ、背景と化していることで有名な、男子学生Aだ。

突然だが俺の愚痴を聞いてくれ！

愚痴と言うのはほかでもない。

「あ、おはよう隆介君♪」

「お、おはよう」

我がクラスのアイドル、高町さんに腕を組まれた男の敵、鈴木隆介だ！！

「ずるい、なのは。隆介の横は私なの」

「フェイトちゃん、何を言ってるノ？隆介君の隣は私のものだよ」

そして同じく、クラスのアイドルでもあるテストロッテさんと、争奪戦が始まった。

「ちょっと、離れなさい！！隆介の隣は私よ！！」

「何を言ってるのかな？隆介君の隣は私だよ？」

そしてバニングスさんや月村さんまでもが、争奪戦に参加した。そんな敵を遠くでさっきを込めて睨み付けるのは……

「ハーレム反対！男子学生B」

「独占反対！！男子学生C」

「男の敵は俺たちの敵！男子学生D」

「モテモテ野郎には裁きを！！男子学生E」

「そして4人をまとめるこの俺、男子学生A！！」

「「「「我ら、鈴木隆介撃退団！！」」」」

俺の同志たちだった。

これは、俺たちの戦いを書いた記録だ。

昼休み。

爽快な屋上。

だが！！

そこの約一か所に、甘い空気が流れてる！！

「はい、隆介君。あゝん」

「ちよつとなのは！！抜け駆けよ！」

「私のから揚げ食べてね」

「あ、そのあとは私のカレーを」

この学校のアイドルでもある高町さんたちに、お弁当のおかず交換をしてもらっている不届きものな男！！
そう！我らの敵！！鈴木隆介がいた！！

「おのれえゝ鈴木隆介めゝ」

男子学生Dがハンカチを口にくわえて遠吠えを上げる。

「おい！お前ら！あれを見ているだけなのか！！」

「そうだ！！何のための団だ！！！！」

俺と男子学生Eの櫓に、今まで挫けていた男子学生たちが、ガバツと勢いよく立ち上がる。

「行くぞ!! 我らの敵を打倒しに!!!」

「「「「おう!!!!!!」」」」

俺の宣言に、ほかの団員が声を揃えて答える。

そして俺たちは横に並んで甘い雰囲気を出している場所へと乗り込む。

「鈴木隆介!!!!!!」

「は?」

俺の声に反応した敵がこっちを驚いた様子で見る。

「な、何のようだ?」

「しらを斬れるとはさすがだ!! 我らはお前を撃退するために結成された団……人呼んで」

「「「「鈴木隆介撃退団!!!!!!」」」」

「男の敵鈴木隆介!!! 年貢の納め時だ!!!!!!」

俺たちの大声の名乗りに周りの男子から拍手が飛んできた。

「いいぞーやれやれ!!」

そして女子からは野次が飛ぶ。

「嫉妬だね」

「みっともないね」

「「「「!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」」」」

女子たちの野次が俺の達の心にダイレクトダメージを与える。
だが!!

この俺はそのような物に挫けるわけには、いかない!!

「我らの敵、鈴木隆介。覚悟!!!!!!」

そして俺たちは一斉に敵の胸ぐらをつかもうとした時だった。
突然俺の進行を邪魔するものが現れた。
それは……

「何をやろうといってるのカナ？」

「私たちの邪魔をしないでナノ」

「あんたたち、何様のつもりヨ？」

「「「「ヒィ!?!?!」」」」

そこには悪魔がいた。

顔は笑ってるが、目が笑ってない。

「あくまでいいよ。悪魔らしいやり方で話を聞くから」

「そうだね。まずは私たちとO☆H A☆N A☆S H Iしよ？」

そして俺たちは少女たちに、引きずられて行った。

その後のことは語りたくない。

ただ、俺たちには到底勝つことのできない者がいることを、学んだ。

今日の失敗は明日の成功への道!!

明日こそは男の敵、鈴木隆介を撃退するぞ!!!!

【TR】 嫉妬戦隊（後書き）

初めての短編小説なので、戸惑ってしまいました。すみません

【ウルフガイ】 とある男の戦う理由

「好きだっ！ あなたを愛している！ お茶しましょう！」

「……はあ」

「無視するなんて殺生な。しかしそんなところもまた好きだ！」

「わかったわ。わかったから少し静かにして」

「たまたま通りすがった廊下で会った一人の男に、カリム・グラシアは深いため息をついた。

その男はしばらく前に管理局から聖王教会へと出向してきた、管理局内に存在する情報部の副部長を務める大尉だった。

当然、何かしらの事を探りにきたのだろうと懸念した。監視役であるのなら、それなりの対応をしようと行動していた。

しかし、男の目的はそういうものとは全くかけ離れていたものだったらしい。

「いやしかし、こうしてお茶を共にできるとはなんたる僥倖。幸せが溢れ出てくるようだ」

「そう。それはよかったわね」

「ええ！ だからカリム殿にもぜひ笑顔を見せてもらいたい」

向かい合って紅茶を飲みながら笑う男の顔を眺めていると、いくらカリムが疑おうとも何かを企んでいるようには見えないのだ。心の底からの笑顔がそこにはあった。

それすらも偽りなのかもしれない。確たる実績がある情報局のスパイは侮れない。その上、彼はその副部長を務めているほどの者なのだ。いくらカリムが見破ろうとも、見破ることができないのが道理だろう。

しかし、それでも。

「どうかしましたか？ まさか、紅茶が気に入らせませんでしたか！？」

「ふふっ……いいえ。でも、少し聞いてもいいかしら」

彼の顔を眺めていたカリムに、彼は思わず問いかけていた。そして心配そうに、自分の入れたお茶を一口二口と飲んで確認している。その慌てたような仕草が、普段は冷静で真面目な彼には本当に似合わなくて、カリムは笑い声をこぼした。

「あなたが私に、その、好きだと言う理由は？ 何か、理由があるの？」

笑うカリムにそんな事を尋ねられ、彼はポカンと口をあけて動きを止めた。

それを見て更に笑い声をこぼすカリムを見て、彼は急いで普段どおりの自分を取り繕って言葉を発した。

「理由なんてありませんよ」

「え？」

すっかり普段どおりに戻った彼が理由を話すと思っていたカリムは困惑した。

そんなカリムへと彼は告げた。大真面目な顔でカリムの顔をまっすぐと見据え、紅茶のカップを掴もうとしていたカリムの手を、両手でしっかりと握り締めた。そのまま彼は動きの止まったカリムの方へとぐいと体を乗り出して、思い切り顔を近づけていった。

そこそこに容姿の整った彼の顔が近づいて、カリムが思わず顔を赤らめた時。ちょうどよく顔と顔の間に空間モニターが現れた。

そのモニターの中に現れた顔が見知ったものだったからか、彼は急いでカリムから距離をとった。

「おや、これはシスター・シャツハ」

『……今、不埒な真似をしていませんか？』

カリムの部下のシャツハ・ヌエラは彼のことを未だに疑っている。ただ、どちらかといえば嫌っている、という方が正しいのかもしれない。普段真面目に仕事をするくせに、カリムに出会うたびに好きだなんだと声を掛ける様子を見ていれば、カリムの秘書である彼女にすれば見ていられないものなのだろう。

『まあいいです。それよりも仕事ですよ。あなたには少し古巣に戻

ってもらいます』

「ほうほう。それは……最近有名なあのエース殿の事ですか？
それとも設立の邪魔をされているあの部隊ですか？」

『……わかっているならいいでしょう。さすが情報部と言っておきます。それでは詳細は追って知らせますから』

「了解です」

空間モニターが閉じ、再びカリムの顔を前にした彼は仕事をする時の表情に戻っていた。正面からそれを見たカリムも顔を引き締める。

そして彼へと、未だにほんのりと紅い頬のままで問いかけた。

「あなたの気持ちを利用したくはありませんが、私たちに協力を――」

「ええ。そのために、私はここに来たのですよ」

カリムが申し訳なさそうに言うのを押しとどめ、彼はすぐさまそう答えた。

一体どこから情報を入手したのかは知らないが、彼はいろいろな事を知っていた。カリムの予知も、その事で教会と管理局の一部とが不和になっている事も。だからこそ、彼は教会に潜入調査するという名目でここへと来た。

その目的はただ一つ。好きな人を助けたかったという、ただそれだけの事だった。

「今は私の気持ちに答えてくれずとも結構！ いずれ、あなたが耐え切れぬほどに惚れさせてみせますよ」

その言葉にカリムが心を動かされたことも知らず、彼は胸を張って部屋を後にした。すぐに行動をしなければならない。だからこそ彼は優秀と言われ、若くして情報部の副部長へと申し上がったのだ。既に彼の頭は仕事のモノへと切り替わっている。カリムたち教会の危惧する『予知』を阻止する為にも色々と働かなければならないだろう。

手始めに、管理局で新しく考えられている『機動六課』の設立を

邪魔する者たちへと働きかけなければならない。それは彼の思っている以上に大変な仕事になるだろう。頭の凝り固まった連中と、頭のやわらかい連中の折り合いをつけてうまく立ち回らなければならないのだ。

「しかし、やりがいはあるな。何せ、男を見せられるかどうかの瀬戸際だ」

彼の顔には自然と笑みが浮かんでいた。彼にとってはカリムへと自分が頼りになると証明するいい機会であり、好きな女の願いを叶える機会でもある。男として燃えないはずもない。

派手に戦うわけでも華々しく勝つわけでもない、ドロドロとした戦いではあるが……彼にとっての全てを決める戦いが始まろうとしていた。

【ウルフガイ】 とある男の戦う理由（後書き）

なんかよくわからなくなった。オチがなかなか付けられなくて書き続けるけどツボにはまるよね。いやはや。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5598u/>

オムレツ短編集

2011年10月9日09時11分発行